

教会暦による説教  
マタイによる福音書16章21節-28節  
『受難予告』

今日からイースターまでの期間は使徒言行録から離れて、教会暦による聖書箇所からみ言葉に聞いてまいりたいと思います。さて、与えられた箇所は、主イエスが弟子たちにご自分がこれから受ける苦しみ、受難を予告された場面です。読んでみてあらためて素朴に思う疑問は、そもそもなぜ主イエスは多くの苦しみを受けなければいけなかったのか、ということです。主イエスが受難の予告をしたとき、弟子の中の年長者ペトロは「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません。」と主を諫めたのです。諫める、という言葉は相手の悪い点を知らせて改めるよう忠告する、と辞書には出てくる言葉ですが、叱る、といってもいい言葉です。ペトロはなぜ、先生である主イエスを諫めたのか。ここを読み急いで、ペトロはイエスのことをわかっていない弟子だったんだ、というのはあまりに性急な考えだと思います。誰もが思うことを代弁しているのではないか。なぜ神の子である主イエスが多くの苦しみを受けなければならないのか。しかもそれだけでない、殺される、というのです。ペトロはまったく理解できなかったと思いますし、それは当然のことではないでしょうか。主イエスはこれまで、病人を癒し、奇跡をおこし、神の言葉を語られてこられた。この方こそイスラエルの民を救う救い主だと弟子たちは皆期待したのです。今も期待しているのです。それなのに、なぜ、多くの苦しみを受けて、殺されていくのか、まったくわからない。了解不可能。あえて言えば、かりにそうなる可能性があるというなら、それを避けるよう考えたらいい。それをなぜ断定したように言うのか。とんでもないことです、そう言って主イエスを諫めたペトロの気持ちはよく伝わってくるのです。

21節を読んでみます。「イエスは、ご自分が必ずエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている、と弟子たちに打ち明け始められた。」この主イエスの言葉は、もう少し原文の感じを出して訳すと、イエスはご自分が長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けねばならず、殺されねばならず、三日目に復活せねばならぬことを弟子たちに打ち明け始められた、ということになります。必ず、と訳されているのは、「ねばならない」という強い意味の言葉で、英語で

言う must、つまり多くの苦しみをどうしても受けねばならないのだ、と予告されたのです。このままでいけばこういう結果になってしまうだろうとか、おそらくこういうことになるだろう、というのとは全く違う。自分の意志として、わたしは苦しみを受けねばならない、ということです。この「ねばならない」という表現、実は新約聖書の中には、たいへん多く出てくる表現なのです。例えばルカ福音書の中にはこういう言葉があります。「しかし、人の子はまず必ず多くの苦しみを受け、今の時代の人々から棄てられねばならない。」この「ねばならない」はギリシア語ではデイという言葉なのですが、多くは神の意志にかかわる表現です。つまり主イエスは神の意志を受けて、ご自分の意志として、多くの苦しみをどうしても受けねばならない、それがわたしの譲れない思いだ、と言われたこととなります。でもどうして苦しみを受けなければならないのか。苦しみを受けることがなぜ神の意志であるのか。

この世界には、さまざまな苦しみがあります。わたしたちが生きている中でも、悲しみとか苦しみとか、深い痛みとか、それぞれに経験していく。わたしだけでなく、わたしたちの周囲に、苦しむ人がいます。東日本大震災から、今日で7年を迎えるのですが、わたしたちは苦しみの中にある人をたくさん見てきました。今もなお、深い痛みの中にある人々がたくさんいる。大災害による苦しみだけでなく、わたしたちの人生には、さまざまな苦しみがある。どうしてそのような苦しみがあるのか。それはわたしたちの心の底の方からの問いです。旧約聖書を読むと、古代の人々にとっても、その問いはまったく同じで、人はなぜ苦しみに出会うのか、なぜ苦しみの中で生きるのか、その問いが旧約聖書を貫く人間の叫びとして流れている。なぜこの世界に、我々の人生に苦しみがあるのか。そのことにわたしたちは安直な答えを出されても納得できない。そもそも納得できるような答えというようなものがあるのか。自分の子どもを失ってしまって痛みと苦しみの中にある人に対して、納得できる答え、というようなものがあるのか。どんな答えが出されたとしても了解不可能、なのではないか。あるいはまた、自分の罪ゆえに相手を苦しめたり、罪ゆえに傷つけたり、しかしその根源の罪そのものは自分ではどうにもならない、という外からではなく、中からやってくる苦しみ。死ななければならないという苦しみ、死という苦しみそのもの。苦しみは外から、中からやってくる。苦しみがあるのか、世界にあることに対して、納得できるような答えがあるのか。つまりわたしたちは、なぜ苦しみがあるのか、ということを知ることができないところで生きているのかもしれない。苦しみの意味が分からないまま、苦しむ。だが、

かりにそうだとしても、その苦しみの中で生きる人間、苦しみを抱えながら生きる人間の中にキリストは降誕された。多くの苦しみをどうしても受けねばならないという意志を持ってキリストは歩み、殺されねばならない、という意志をもって十字架に向かわれたこと、それがあの受難予告で語られていたことです。わたしたちが生きるということは、苦しみと向き合うことを避けられない。その苦しみ悲しみは、さまざまでありつつ、生きることは苦しみを抱え込んでいる。なぜそういうことになっているのかはわたしたちにはわからないことが多い。理解できないことが多い。しかしそのわたしたちの中にキリストはおいでくださって、多くの苦しみを受けるものとして生き、死を死んでいかれた。つまりわたしたちの苦しみの中にキリストは立ってくださっているということです。

そしてその十字架の死で死んだキリストを神がよみがえらせたということは、その苦しみにおいて、神は救いの業を成し遂げられたということです。我々の人生がどれほど苦しみの中にあっても、その意味がよくわからなくても、そこにキリストは立ってくださり、そこでキリストは苦しみを受け、そこにおいて神は救いの道を示された、ということです。それが復活ということです。

ルカ福音書に徴税人ザアカイという人の話が出てきます。彼は税金を徴収する人でしたが、不正を働いていたのか、余分に集めた税金で金持ちになって、人々から嫌われていた。ザアカイの住む町に主イエスがやってくることになり、彼はイエスを一目見ようとするのですが、彼は背が低くて大勢の人にさえぎられて、見るができない。ひょっとしたら、嫌われザアカイだから、みんなに邪魔されたのかもしれない。そこでザアカイは先回りして木によじ登り、木の上からイエスを見ようと思いました。

主イエスがその木の下を通られた時です、主は木の上のザアカイに向かって、「ザアカイ、急いで降りてきなさい。今日はぜひあなたの家に泊まりたい。」と声をかけるのです。このぜひ泊まりたい、と訳されているここはあのデイというギリシア語が使われている。つまり直訳すると、今日はあなたの家にどうしても泊まらねばならない、ということです。

自分の蒔いた種とはいえ、みんなから嫌われる、というつらいことです。嫌われるから、また税金を必要以上に取ってしまう、そしてさらに嫌われる、そういう負のスパイラル、循環が生まれていった。ザアカイは苦しい人生を生きていた。その彼に対して、主イエスはただ声をかけた、というのではない。ちょっとだけおしゃべりをした、というのでもない。いきなり、今日はあなたの

家に泊まるのだ、どうしてもあなたの家に行ってあなたと時をすごすのだ、と言われた。それはザアカイ一人を目指す言葉です。ザアカイを呼び降ろし、ザアカイの中にもっすぐに入って行く、主イエスの意志がそこにある、そういう「ねばならない」なのです。

ザアカイの生きる苦しみが霧散霧消したわけではないし、ザアカイの生き苦しさがなくなったわけでもない。しかし、ザアカイは、自分がキリストの自分という存在を受けとめる意志に出会ったのです。彼はその中で苦しむこともできるようになっていくのです。

キリストの受難予告は、わたしたち苦しみの中に生きるものに対する、存在の受領です。わたしはあなたが人として受ける苦しみを受けて、あなたの死を死んで負っていく、というキリストの意志です。そして、その苦しみの現実の中に、そこに神の救いの業は働き、示される、だから、あなたは苦しみの中で安心して苦しんでいい、というキリストの告知です。

主イエスを諫めたペトロは「サタン、引き下がれ」とまで言われました。ペトロの諫めは人間として、常識的な、成熟した意見でした。しかしどんなに人間的に見て成熟した考えであろうと、神の意志を思わず、神の意志を退けようとするのは、サタンの働きなのです。ペトロの中に入り込み巣くっているサタンの働きなのです。

主イエスが24節で弟子たちに言われた有名な言葉、「わたしについてきたいものは、自分を捨て、自分の十字架を背負ってわたしに従いなさい。」は、いろいろな解釈を生み出してきた言葉ですが、神の意志ということから見れば、言わんとすることは明快です。「わたしについてきたいものは、自分の意志ではなく、神の意志に聞きなさい。自分の意志は捨ておいて、つまり自分に死んで、神の意志がどこにあるか聞きなさい。自分の十字架を負うということは自分に死ぬこと、自分の意志を放棄して神の意志に聞くこと、そしてそこで「自分の命を救いたいと思うものはそれを失うが、わたしのために命を失うものはそれを得る。」ということがわかるだろう、主イエスはそう言われたのです。